

国学者井上喜文の『土佐日記読本』と『土佐日記考証』書入れについての一考察

村田 駿

はじめに

井上喜文(文政十一年(一八二八)〜明治二十七年(一八九四)七月三十日)は、埼玉県入間郡石井村(現坂戸市)の国学者・歌人である。

その父井上淑蔭は、幕末から明治初期にかけて活躍し多くの著述をなした国学者・歌人であり、先行研究や展示などで取り上げられている⁽¹⁾。しかし、息子喜文についてはあまり取り上げられないことがない。ただ、喜文も国学者として多くの著作を成しており、当時の国学や井上家文書を考えるうえで重要である。

埼玉県立文書館には、井上家文書四三五〇点が寄託されている。淑蔭の文書が中心だが、喜文の資料も残されている。その中には、出版物だけでなく備忘録・草稿・既存の出版物に注記を書入れたものなどがあり、喜文の考えや学問を考えるためにも貴重である。

令和六年度には、『文書館紀要』第三八号に「国学者井上喜文の『紫式部日記傍註』書入れと「紫式部日記抜書」についての一考察」として取り上げた⁽²⁾。

これに続いて今回は、喜文による『土左日記』⁽³⁾ 関連の資料を考察

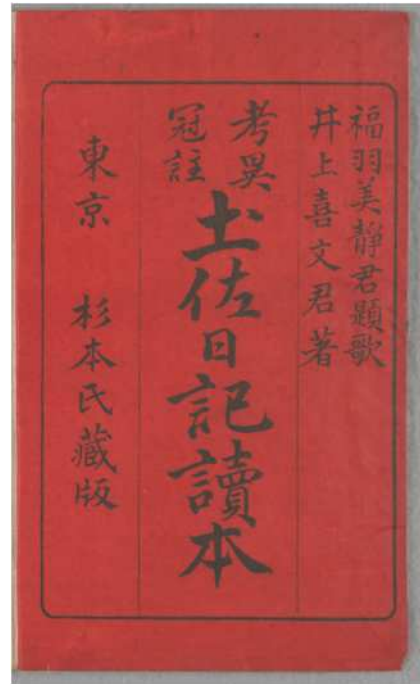
する。その関係性を解明することで、喜文の学問を知る一助としたい。

1 井上喜文の『土佐日記』関連資料について

井上喜文は明治二十六年(一八九三)『考異冠註』土佐日記読本⁽⁴⁾を著し杉本書店から出版している。埼玉県立文書館収蔵の井上家文書にはない。国立国会図書館をはじめ、いくつかの図書館に所蔵されている。今回の分析には、家蔵の『土佐日記読本』を用いた。

【資料1】井上喜文著『土佐日記読本』





井上喜文『土佐日記讀本』 明治二十六年(一八九三)

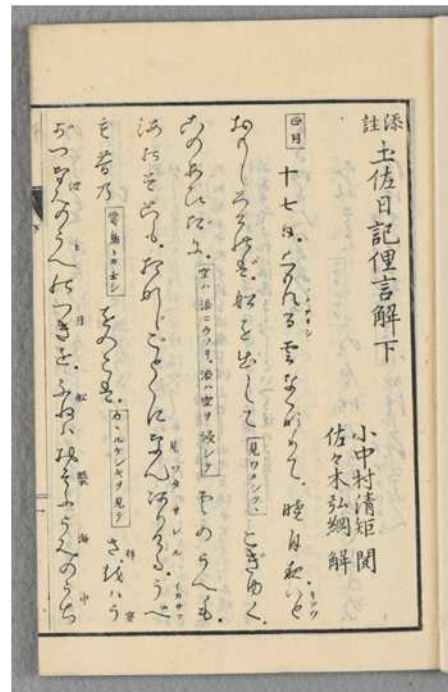
この『土佐日記讀本』の緒言には先行する諸注釈を参考にしたとある。井上家文書には、参考にしたものがあるのではないだろうか。

【資料2】埼玉県立文書館収蔵 井上家文書『土佐日記』関連資料



井上家文書二八六六

岸本由豆流『土佐日記考証 上下合冊(版本)』文化十二年(二八一五)



井上家文書二八六七

佐々木弘綱『添註土佐日記俚言解 下巻(版本)』明治十七年(一八八四)

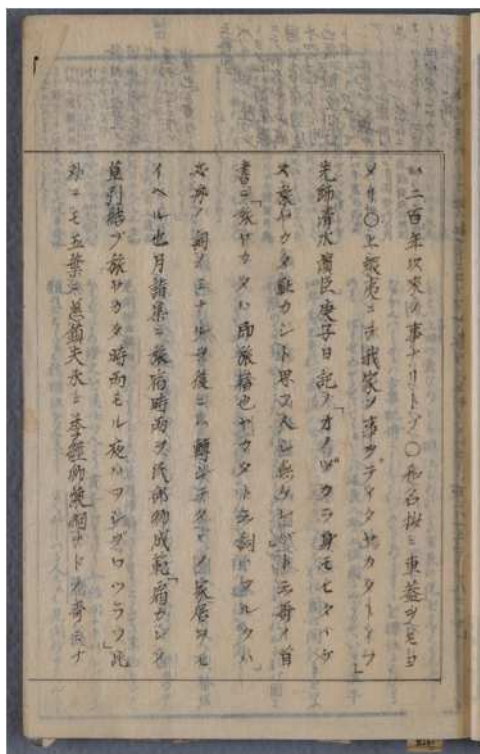
井上家文書を扱うには、淑蔭に関連するものか、それとも喜文に関連するものかを確認する必要がある。

まず、井上家文書二八六七『土佐日記俚言解』(以下『俚言解』)については、その出版年から、淑蔭没(明治十九年 一八八六)直前であるため、喜文の時代の資料であるとわかる。

井上家文書二八六六の『土佐日記考証』(以下『考証』)は、多くの書入れや付箋、ページのとし込みなどが見られる資料であり、一般に流通している『考証』とは異なる性質を持っている。なお『俚言解』には、書入れはほぼ無い。

『考証』の使用者を考えるにあたって次の資料が注目される。

【資料3-1】井上家文書二八六六『土佐日記考証』綴じ込み



これは、二二丁裏と二三丁表の間に二二分存在する綴じ込み資料である。「館」について、『玉篇』『和名抄』『和訓栞』等を引いて言語の注釈をしている。それに続く、文中に次のような記述がある。

先師清水濱臣庚子日記ノ「オノヅカラ身モヒタ、ケス旅ヤカタ耻カシト思フ人シ無ケレバ」ト云哥ノ首書ニ「旅ヤカタハ即旅宿也ヤカタト云詞ハフルクハ必舟ノ詞ノミナルヲ後ニハ転ジテタゞノ家居ヲモイヘル也月詣集ニ旅宿時雨ヲ民部卿成範「霜カレノ草引結ブ旅ヤカタ時雨モル夜ハフシヅワツラフ」此外ニモ玉葉ニ慈鎮夫木ニ季卿懐綱ナドノ歌ミナ：

注目したのは、清水濱臣を「先師」と表現していることである。「先師」は「亡くなった師匠」のことを指す。

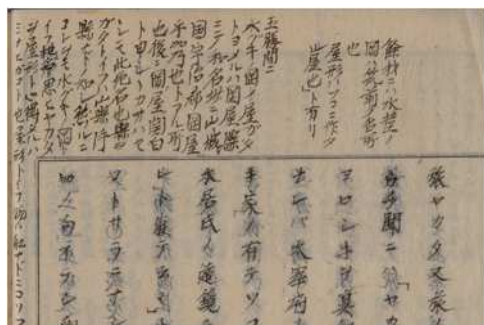
喜文の師は、父井上淑蔭である。『淑蔭年譜』⁽⁵⁾には、「文政三年 庚辰 一七 江戸に出で清水濱臣の門に入る」とあり、父淑蔭は文政三年(一八二〇)に清水濱臣に入門したことがわかる。

ただ、『井上家文書目録』⁽⁶⁾などでも触れられているように、実際は文政七年(一八二四)に濱臣は亡くなり、その後濱臣の養嗣子清水光房に指導を受けた事が多いようだ。

また、『読史総覧』⁽⁷⁾では、村田春海門下として、濱臣と同門であった岸本由豆流の弟子井上文雄の弟子として淑蔭が記されている。資料のうちでも、四〇年間にわたる親交や、淑蔭の著書への序文等の関わりから井上文雄の門下に入ったとされる⁽⁸⁾。

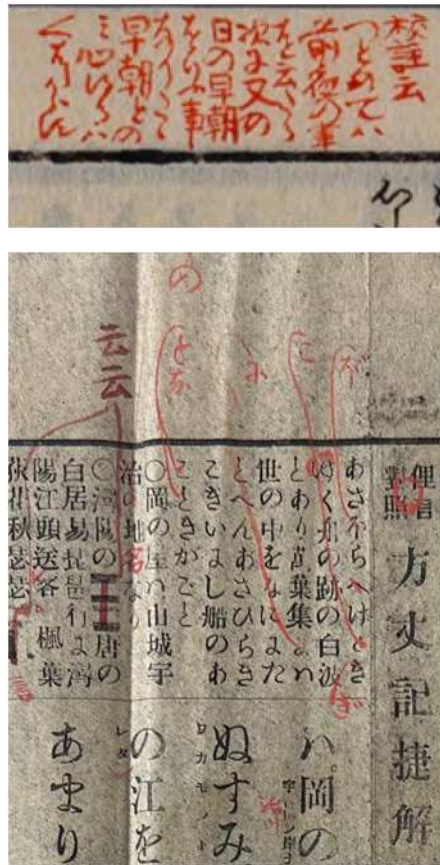
淑蔭は複数の師匠を持つが、早くに亡くなった濱臣を【資料3-1】で「先師」と表現することは頷ける。また、淑蔭自筆と呼ばれる資料と筆跡も近く⁽⁹⁾、この綴じ込みの内容は淑蔭のものである可能性が高い。

【資料3-2】井上家文書二八六六『土佐日記考証』綴じ込み二



また【資料 3—2】にあげるように、この綴じ込みの記述に対しても 2 か所書入れがされている。この内容は、上の画像が朱書きで綴じ込みの記述の概要が頭出しされており、下の画像は書ききれなかった用例を追加しているように読める。これらの書き込みも、淑蔭の筆跡に近い。

【資料 3—3】『考証』書入れと喜文の筆跡



【資料 3—3】は上の画像が『考証』（上三二丁裏）の書入れである。下の画像が、井上喜文著『方丈記捷解』の校正（井上家文書二五九四）で喜文の筆跡がわかる。比べると、「云」や「の」の丸い書き方が似通い、【資料 3—2】とは異なる。

これらの内容や筆跡から、『考証』は、親子二代にわたって書入れが行われた資料なのではないかと考えられる。

次に、今確認した二点の注釈書と喜文著『土佐日記読本』の関係も確認しておきたい。『土佐日記読本』の緒言には次のような記述がある。

【資料 4】井上喜文著『土佐日記読本』緒言

緒言

此日記の文諸本大に同じくして、少しく異なる所既に先達の諸註にて一涉り解し難き遺憾もなきが如くなれど、猶いかにぞや覚ゆるところ無きにしもあらぬを考へ見ん、とてこの考異は思ひ起しつるなり。さて元文は定家卿奥書し給へるを刊行したる流布本に拠り、かたはら参考せる書目は抄本^{北村季吟著}、附註^{人見、幽}、考証^{岸本、淵}、校註^{加藤、藤}、創見^{香川、橋}、直路と拳たるは船の直路^{橋守、淵}、俚言解は添註俚言解^{橋守、淵}、参考は参考標註^{岸本、弘}、拾葉は扶桑拾葉本、類従は群書類従本、妙寿院本は抄にあけたる校をとる、為家卿本は考証に引たるを其他なをあれどさのみはとらず。異同取捨したる故よしは其所々余りこと繁くならんを思ひて大方は省きて至要の所のみを頭かきせり。また書肆の乞ふままに、いささか語解をもくはへつ。

著者しるす

(※傍線筆者)

ここに書かれているように、喜文は『考証』と『俚言解』とその他の先行する注釈書とを見比べて『土佐日記読本』を著している。

このような事実を並べると、『考証』の書入れは、『土佐日記読本』著述以前の喜文が、『土佐日記』に対する考え方を記したものと推測される。

『考証』書入れと『土佐日記読本』との関係性をさぐることで、著作執筆過程の喜文の考えに迫り、また『考証』の史料的価値を確かめることができるのではないだろうか。

2 喜文が参照した『土佐日記』注釈書

喜文の注釈活動を分析するため、『土佐日記』注釈書の流れを確認したい。次に『土佐日記読本』の緒言に挙げられた注釈書を列記する。

【資料5】『土佐日記』の注釈書の流れ

- 1 北村季吟『土佐日記抄』寛文元年(一六六一)
- 2 人見卜幽軒『土佐日記附註』寛文元年(一六六一)
- 3 岸本由豆流『土佐日記考証』文化十二年(一八一五)
- 4 加藤磯足『校註土佐日記』文政元年(一八一八)
- 5 香川景樹『土左日記創見』文政六年(一八二三)
- 6 橋守部『土佐日記舟の直路』天保十三年(一八四二)
- 7 佐々木弘綱『添註土佐日記俚言解』明治十七年(一八八四)
- 8 鈴木弘恭『参考標註土佐日記読本』明治十八年(一八八五)

明治二十六年(一八九三)に出版された『土佐日記読本』が参照している注釈書は、寛文元年(一六六一)の北村季吟の『土佐日記抄』から、明治十八年(一八八五)の鈴木弘恭『参考標註土佐日記読本』まで、長期間にわたり、広く先行の説を集めて精選しようという意識がうかがわれる。その中には、『土佐日記舟の直路』は含まれているが、それに反論して地理的な研究を深めた鹿持雅澄『土佐日記地理弁』(文久三年 一八六三)などの地理的な解説に特化した注釈書は含まれていない。和歌に秀でた貫之の作品であることもあり、歌学に秀でた著者の注釈書が多い。佐々木弘綱の『俚言解』や鈴木弘恭の『標註』から、『土佐日記読本』の出版までは一〇年程度しか離れていない。喜文が執筆した時期は、『土

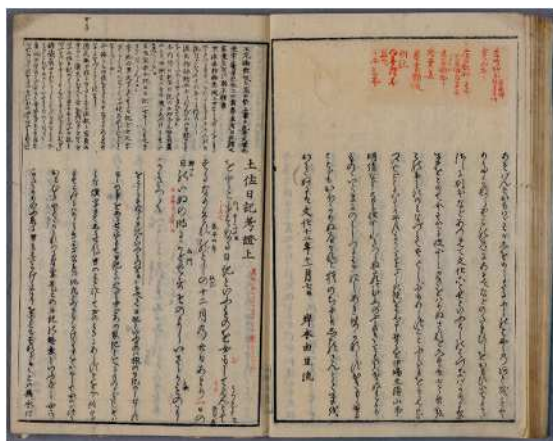
左日記』の研究が活発な時期であったといえるだろう。

喜文の著書は、『読本』という表題を冠しているように一般読者や教科書のような使用を目的とした書籍なのではないかと思われる。「緒言」にも「異同取捨したる故よしは其所々余りこと繁くならんを思ひて大方は省きて至要の所のみを頭かきせり。」とある。

続いて「また書肆の乞ふままに、いささか語解をもくはへつ。」と書かれており、書肆の依頼で自身の語釈を加えていることが断つてある。

3 『考証』書入れと『土佐日記読本』の比較 1 概要と傾向

【資料6】『考証』書入れの様子



井上家文書一八六六『土佐日記考証』上 一一丁裏〜一二丁

『土佐日記読本』作成時に参照され、井上家文書収蔵資料の中で書入れや付箋、頁の挿入が見られる『考証』について検討していく。

『考証』にある書入れ等は、文字があるものだけでも約七〇箇所⁽¹⁾ある。そのため、まず概観してわかる情報を説明し、そのあと特徴的な例をいくつか挙げてその傾向を考察する。

『土佐日記考証』そのものつくりは、頭註と傍註、本文の後の注釈に分かれる。ここにさらに、書入れなどが加わっている。まずは、注記の種類について傾向がみられるので確認をしたい。

【資料7】『土佐日記考証』注記の種類

1、朱墨注記貼りつけ

一例のみ。上巻一一丁裏右上に存在。「季吟抄本(定家卿自筆本同) 寛永本 土佐日記抄(季吟 定家卿自筆本ニオナシ) 為家卿本 拾葉集 群書類従 附註 妙寿院本 烏丸 イ本 三本」とあり。

作品本文が始まる直前に位置している。2の朱墨注記と一部対応している。対校本文の底本の出典をメモしているようである。

2、朱墨注記

本文や、頭書注記、本文末註に対して朱墨で書入れを行っている。また『考証』が掠れている箇所を補ったりもしている。最も多い書入れ方法。淑蔭と思われる筆跡と喜文と思われる筆跡が混在している。

3、朱墨頭書注記

2の朱墨注記の中でも天側の余白に書き込まれた注記。「校註云」ではじまり、校註が個別に場所を決めて、書入れられている。喜文と思われる筆跡である。

4、黒墨頭書注記

一単語のみを天に近い余白に書入れてある。『考証』の本文末注釈の箇所についていることが多く、本文末注釈の頭出しであると考えられる。一一丁表の画像左上には「女手」とある。喜文と思われる筆跡である。

5、地側黒墨付箋

五例。付箋がつけられているのは「館」「県」「諱」「逆語」「ユカズ」である。喜文と思われる筆跡である。

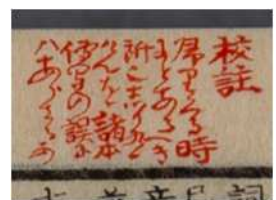


(上 一六丁表)

6、黒墨書入れ紙、綴じこみ

一例のみ。一二丁裏と一三丁表の間に存在。二丁。両面に各九行、記述あり。内容は「館」という言葉について。九行の記述に対する黒墨書入れもあり、どこことなく辞書類の頁を抜き取ってここに挟んで綴じこんだ雰囲気もある。挿入位置としては、『土佐日記』冒頭に国司としての任期が果てて、任地で住んで

(下 五丁裏)



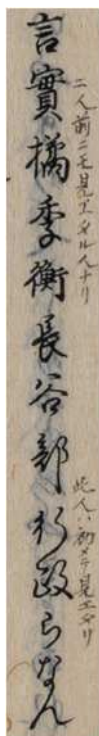
いた「館より出でて」という場面に綴じこんであり、意図的にこの位置に綴じ込まれている。【資料3】として前述。

7、黒墨大型貼りつけ

一例のみ。上巻一〇丁裏にある。貫之の経歴について記述が貼りつけられている。淑蔭と思われる筆跡である。

8、薄墨傍記

2朱墨注記が異文や異説の書入れが多いのに対して、薄墨傍記は考えのような記述が多い。例は少ない。淑蔭と思われる筆跡である。



(上 三二丁表)

9、ピンク紙青紙片貼りつけ

資料全体に存在。本文や注記に重なることなく近辺に貼りつけてある。言葉の横に貼ってある為、何らかの意味を持つものと思われる。『考証』では、後半にかけて外の書入れが少なくなくなり、貼りつけが増えていく傾向にある。

この貼りつけは、『考証』以外にも、井上家文書の他の注釈書類にも確認される。



(下 五丁裏)



(下 九丁表)

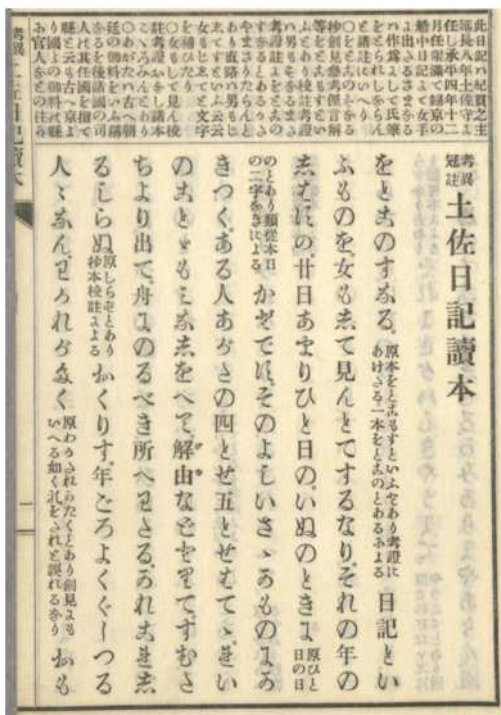
10、朱墨傍線

明らかに性質が異なり、傾向が見受けられるのはこの一〇例かと思われる。注目されるのは、3の朱墨頭書注記で、『土佐日記校註』の書入れを別記しており、同書からの書入れが多い事である。

また、9の紙片貼りつけについては、当資料のみの問題ではなく井上家文書の他の注釈書類にも同様の貼りつけがあり、喜文の辞書類の著作などの用例調査の跡かとも想像されるが、まだ調査が必要である。

このような『考証』の書入れに対して、『土佐日記読本』の注釈は、割注と頭注が存在する。約三三四箇所についている。「緒言」にも書かれていたように、先行する注釈の肝要な部分を取捨選択、参照して注釈されている事に特徴がある。その中で、最も多く参照・採用されている注は、『土佐日記考証』である。調査方法は、次のとおりである。

【資料8】井上喜文著『土佐日記読本』の注釈 一丁表



「(本文)をとこのすなる(一丁表)」

「(頭注)をとこのすなる抄創見参考俚言解等をともすといふとあり校註考証は男もすなるまた考証註にをとこのすなるとあるかたやまさりたらんとあり直路は男もじしてすといふ云々女もしてと文字を補ひたり」

「(傍注)原本をとこもすといふとあり考証にあけたる一本をとこのとあるによる(一丁表)」

【資料8】をみると、頭注では、本文決定のために諸註を比較している。その中で『土佐日記読本』の本文に採用された「男もすなる」を上げているのは『校註』と『考証』である。また傍注でも「考証」にあけたる一本をとこのとあるによる」とあり『考証』を肯定している。

このような場合に『土佐日記読本』が『校註』と『考証』をそれぞれ一回参照・採用したとして、一票とカウントし全三三四箇所を調査した。また、「諸注」などの表記はカウントしなかった。また、注釈書の名前があがらない注釈は喜文としてカウントした。

【資料9】井上喜文著『土佐日記読本』が参照・採用している注釈

- | | | |
|---|---------------|-----|
| 1 | 北村季吟『土佐日記抄』 | 三 |
| 2 | 人見卜幽軒『土佐日記附註』 | 一六 |
| 3 | 岸本由豆流『土佐日記考証』 | 八八 |
| 4 | 加藤磯足『校註土佐日記』 | 三三三 |
| 5 | 香川景樹『土左日記創見』 | 九 |
| 6 | 橘守部『土佐日記舟の直路』 | 七 |

- | | | |
|---|------------------|-----|
| 7 | 佐々木弘綱『添註土佐日記俚言解』 | 一〇 |
| 8 | 鈴木弘恭『参考標註土佐日記読本』 | 三 |
| 9 | 喜文注 | 一八三 |

『土佐日記読本』で参照・採用されている注釈の傾向は以上の通りである。もちろん注釈の受け取り方など、カウントに多少のブレはあることだろう。ただ、ここで確認したいのは、圧倒的に『考証』を参照・採用している箇所が多い事だ。

喜文の学問の傾向をここに見たい。『土佐日記考証』は岸本由豆流の著書であり、前述のとおり師匠筋の注釈書である。

【資料10】井上喜文にいたる国学者師弟図

- 清水濱臣—井上淑蔭—井上喜文
岸本由豆流—井上文雄—井上淑蔭—井上喜文

ここで確認した『土佐日記読本』の注釈での『考証』参照・採用数は、書入れが多い『考証』と『土佐日記読本』との結びつきを示唆している。また、次点で『校註土佐日記』の参照・採用数が多いのも『考証』に朱墨頭書注記「校註云」という記述が多いことと符号するようである。この点でも、『土佐日記読本』と『考証』は強い結びつきを示している。

4 『考証』書入れと『土佐日記読本』の比較 2 具体例

この節では、『考証』の書入れは、『土佐日記読本』にどのように反映されているかをいくつかの例を挙げて確認する。

また、師匠筋の『考証』の参照・採用が多いことは前節において述べ

だが、『考証』や先行注釈の説をそのまま採用するだけの注釈者ではなかったことは強調しておきたい。

確認する場面は『土左日記』正月七日の記事である。国司の任を終えて都へ帰る一行の舟は、正月二日から一向に進まず、大湊に泊っている。もしも都についていれば白馬の節会など華々しい行事があったであろうが、せっかく七日を迎えたのにこの港から動けない人々が描かれている。

その中で、ある人が「ゆくさきにたつしらなみのこゑよりもおくえれてなかむわれやまさらむ」と歌を詠む。大声でこれが詠まれたが誰一人として返歌をしない。そこへ「或人の子の童」がひっそりと返歌をしようとする。だが、返歌が遅くて「ゆくさきに」と詠んだ歌主は帰ってしまった。機を逸してしまったので、この童は恥じて歌を出さなかったが、それを無理やりききだした歌が「ゆくひともともあるもそでのなみだがはみぎはのみこそぬれまさりけれ」であった。

この返歌にたいする反応は「かくはいふものか」と表現されている。この反応について注釈がついている。

【資料11】「かくはいふものか」に対する注釈 継承方法

・『考証』「かくはいふものか」云々 聞書云かやうにもよくよみたる物かなとほむることばなり」

・『考証』朱墨書入れ 「驚ク詞」

・『読本』「ものかは驚き思ふ詞なり故にかなの詞を云きらぬはおのつからの語勢也(七丁表)」

『考証』は『聞書』を引用し、「ほめる」表現だとする。それに対して、『考証』への朱墨書入れでは、「驚ク詞」として「おどろく」だけで解釈を止めている。そして、『読本』に至っても「驚き思ふ詞なり」と『考証』が挙げる説を訂正して、書入れは自説をのべている。

また、「故に」とその根拠を挙げ「ものか」の「か」は、感嘆の「かな」の言いかけでその語勢こそが「驚ク詞」なのだと言っている。

ここからは、『考証』の書入れ、そして喜文の『土佐日記読本』は『考証』の説を無批判に継承するだけでなく、自身の見解で注釈をしていることが明らかである。

そして、語法的な解説がなされていることも特徴の一つである。次に、複数回注釈されている「逆語」について考えてみたい。「逆語」への書入れは淑蔭らしき筆跡も、喜文らしき筆跡もどちらも存在する。

『考証』書入れでは三か所「逆語」という用語で解説されている項目がある。十二月二十五日条、二十六日条、一月七日条に見られる。

まず一つ目の十二月二十五日条は、新しい土佐守の館から宴会の使者が来た時の表現「呼びに文もて来たなり」とある。これを喜文は「逆語ノ格」と注している。

【資料12】「よびにふもてきたれり」の注釈 逆語

・『考証』本文 「よびにふもてきたれり」

・『考証』朱墨書入れ 「逆語ノ格」

・『考証』付箋 「逆語」 (上 一六丁表)

二つ目の十二月二十六日条では、まだ新任の土佐の守の館で饗宴があり、それに奉仕した者たちに禄を与える表現、『考証』の本文「をのこ

あまたに」に対して「逆語」と朱書きて注している(上 一六丁裏)。

なお、この箇所本文は「郎等までに」という異同が存在する。『土佐日記読本』に至ってはこの異同を採用し「をのこらまでに」(二二丁裏)となっており「逆語」などの注はない。

三つ目の、一月七日条は先にも取り上げた場面である。七日に行われる白馬の節会を祝う事ができずに残念がる一行のもとに、鮒などの川や海の産物が献上される。献上元の表現「人の家のいけと名ある所より」に「逆語」という注がついている。

【資料13】「人の家のいけと名ある所より」の注釈 逆語

・『考証』本文「人の家のいけと名ある所より」

・『考証』注釈「人の家のいけと名ある所より云々 いけは土佐国の地名なるべし いけといふ所の人の家よりと心得べし 人の家の云々とあるを異本に人の野のみとあるかたやよろしからん さてその意はいけといふ名ある所なれども池にある鯉はなくて川の物海の物などおこせりと禮のたはふれかけるなり」

・『考証』朱墨書入れ「逆語」 (上 二五丁裏)

・『読本』本文「ひとの家の。いけと名あるところより。」(六丁表)

三例を通じてみると語順に注目した注釈であることがわかる。例えば、三例目の「人の家のいけと名ある所」の「の」は同格の助詞で、「人の家」で、池と名のある所から」と解釈される。語順を整理すると「池と名のある人の家から」とすることができる。同じように、二つ目の例では、「をのこであって大勢いる人々に」ではなく「大勢いるのをのこに」とし、

一例目では「呼ぶのに文をもつてきた」ではなく「文をもつて呼びに来た」と語順を逆さにして理解せよという注釈だと考えられる。

この「逆語」という用語は『土佐日記読本』では見られない。

「逆語」という術語を使って書入れされる箇所が多いことは、喜文が辞書などの著作を持つ語法に強い注釈者であるとい側面が出ているのではないだろうか。また、『土佐日記読本』にその書入れが生かされないことについては、『土佐日記読本』という初学者むけの性格がここに表れているのだと考えられる。喜文は、読者を想定して注釈の密度を調整していたのではないかと思われる。

続いて、語法関連の例を確認したい。正月七日の場面で、童に待たされた歌主がまだ帰らないものの座を立った際に用いられた表現「『まだ罷らず』といひて立ちぬ」に次のような注釈がついている。

【資料14】「まからず」についての注 語法的

・『考証』「またまからずといひて云々 こは標柱にあげたる聞書の説の如く またまからんず といふ意なり 今もかた田舎の方言に ゆくる を ゆうず といひ くふる を くはず などいふがごとし これらもみな ゆかんず くはんず の意なり 外をばおしてしるべし」(上 二八丁裏)

・『考証』朱墨書入れ「東海道駿河アタリニテ用(ツカ)フ詞 ナリ
ズは不ノ意ニアラズ」



・『考証』朱墨傍記「まのこ」 (上 二八丁裏)

・『読本』「まからずはまからんずとはねてよむ まかるは退く事に
て又他へ行ことをもいへり こゝは歌主不興にて俗にま
ありましやうと云て立たるなり。」(六丁裏)

この箇所、「罷らず(帰らない)」と言いながら席を立つ歌主の行動を
どのように解釈するかが難しい。そのため「罷らず」を「帰る」と解釈
できないかと考えたらしい。『考証』は、『聞書』の説を拾い方言では、
通常「くゝる」であるところを「くず」でと発音するのだと言っている。
それに対して朱の書入れがその方言は「東海道駿河アタリ」だと断定し
ており、やはり「不ノ意」否定の意味はないとっている。

この方言についての書入れは淑蔭の筆跡らしく思われる。淑蔭は、方
言についての知識を収集していたものとみえ、国学者たちの交流の影響
も考えることができるだろう。

ただ、この方言の説は『土佐日記読本』には反映されていない。『考
証』の別箇所には「まからず」に朱書きで傍記し「まからうずる」と読
ませている。この筆跡はどちらか判別できない。『土佐日記読本』では
これに近い注釈で「まからんずる」と跳ねて読むのだという。ここに意
志の助動詞「む」などを発生させて否定の意味を回避している。

このように方言についての注釈は、『土佐日記読本』には採用せず、
語法的な解説のみを採用している。初学者むけの『読本』としての喜文
の選択がここに見て取れる。

次に、『考証』書入れにある「校註云」の記述がそのまま『土佐日記
読本』の記述に反映されている例をあげる。この「校註云」の筆跡は喜
文だと考える。

場面は、一月二十日条で、あまりに都に到着しないので、かつて唐土
に渡り帰れなくなった安部仲麻呂の例を思い出す件である。ここでは
「なかまろのぬし」という表現の特に「ぬし」について次のような『考
証』朱墨書入れがなされている。

【資料15】「仲麻呂のぬし」について 校註云

・『考証』朱墨書入れ「校註云 仲麻呂のぬし なにのうしといふ
のうの約ぬにて ぬしといふなれば のぬしといふへか
らす 古書にさることあることかし 然れとも後はぬ
しとふ詞 一つの詞となれるは中比よりの文さまには
こゝの如く何のぬしともかくへけれと 古文には書まし
き事也」(下 一六丁表)

・『読本』「なかまろのぬし 校註に なにの大人(ウシ)といふのう
の約ぬにて ぬしといふなれば のぬしとはいふへか
らす 古書にさることなし 然れとも後はぬしといふ詞一
つの詞となれは 中頃よりの文さまには こゝのこと
く何のぬしともかくへけれと 古文にはかくまじきこと
なりとあり(二四丁裏)

これは、『考証』の朱墨書入れほぼ同文が『読本』に反映されている。
ここから、『読本』作成時に、諸注釈の説も『考証』に集約してから『読
本』に反映されているのではないかと考えられる。

まだ個別の場面については、考察を要するが今回の調査で気づいた特
徴は以上の点である。

おわりに

各節を振り返り本論をまとめめる。

1 では、井上喜文の『土佐日記』関連資料について確認した。著作として『土佐日記読本』があった。次いで埼玉県立文書館に寄託された井上家文書にある資料には、『土佐日記考証』（井上家文書二八六〇）と『土佐日記俚言解』（井上家文書二八六七）があった。『土佐日記俚言解』（井上家文書二八六七）については、出版年が井上淑蔭没年と近いため、喜文が用いた資料であろうと推定した。

また、『考証』と『俚言解』はどちらも『土佐日記読本』の「緒言」によると『土佐日記読本』作成時に参照された注釈書であった。

その中でも『考証』には、書入れや綴じこみがあり、出版された注釈書以上の情報を含むことが分かった。綴じこみの記述の中には「清水濱臣」を「先師」と表現する記述があり、それらをはじめとする記述は淑蔭の筆致とも一致していた。一方で「校註云」とはじまる朱墨頭書注記は、井上喜文著『方丈記捷解』の校正（井上家文書二五九四）の筆致と一致しており、『考証』の書入れは、親子二代のものが混在していることが明らかにになった。

2 では、『土佐日記読本』作成の際に喜文が参照した注釈書を確認した。前後の出版状況や『読本』という書名から、一般読者や初学者むけの教科書のような性質を持つのではないかと推測した。

3 では、『土佐日記読本』と『考証』について、その概要から傾向を把握した。『考証』書入れについて、形態から一〇分類に区別した。

次に、『土佐日記読本』の注釈は頭注と傍注からなり、三三四箇所を

数えた。「緒言」に挙げられた先行注釈との関係をとらえる為に、注釈箇所から傾向を分析した。『土佐日記読本』で参照・採用された注釈は師匠筋である岸本由豆流の『考証』に偏っていることが分かった。

4 では、『考証』と『考証』への書入れ、『土佐日記読本』の注釈という3点がるべく比較できて、喜文の注釈の特徴を観察できる例をいくつかあげて考察した。

この結果下記のような特徴が今回の調査で確認できた。

・『考証』書入れには淑蔭、喜文二人の筆跡が見られた。そのため、継承して使用されたと考えられる。

・『土佐日記読本』では、『考証』からの参照・採用が圧倒的に多い。ただ『考証』の説を無批判に継承するだけでなく、内容を吟味し批判して自説をのべている箇所もある。

・『考証』書入れの段階では、語法や方言などへの興味関心や解説が見受けられる。『土佐日記読本』では語法の解説数は多いが、術語を使うほど踏み込んだ解説はなされていない。初学者むけの出版物として調整を行っている工夫がみられる。

・『考証』の天の部分に決まって朱で書き込まれていた『校註』の書入れは、ほぼそのままの形で『土佐日記読本』へ掲載されていることもあった。『考証』は書入れによって、執筆前の情報集約の役割をしていたのではないかと考えられる。

個別の用例については、より分析が求められる。

以上のように、出版された『土佐日記読本』と井上家文書二八六〇『土佐日記考証 上下合冊（版本）』は、非常にかかわりの深いものと考えられる。

『土佐日記読本』は、喜文が著した注釈書の中では初期の著作である。同年の明治二十六年(一八九三)に『徒然草捷解』、翌明治二十七年(一八九四)には『方丈記捷解』が出版される。前述のとおり喜文はほかに『土佐日記捷解』なる注釈書を著していたと伝わるが存在を確認できない。もし、その存在があれば、4で確認したような語法などの知識がもっと生かされた著作となっていたかもしれない。井上家文書にある『土佐日記考証』(井上家文書二八六六)への書入れは『土佐日記読本』のための情報集積であると共に、著作に載せきれなかった喜文の『土佐日記』研究の一部を残すものであり、喜文の学問を知るうえで重要だと考えられる。

註

- (1) 稲村坦元「井上淑蔭と林信海」(『埼玉史談二二巻二』、一九六四年)、『農村の知識人たち・奥貫友山・井上淑蔭・林信海』(埼玉県立文書館、一九八九年)、若松良一「古墳葬制の変革と横渟屯倉の設置時期―当館寄託井上淑蔭資料の石櫃畧図を契機として―」(『文書館紀要』第三二号、二〇一八年)など
- (2) 村田駿「国学者井上喜文の『紫式部日記傍註』書入れと『紫式部日記抜書』についての一考察」『文書館紀要』第三八号、二〇二五年)
- (3) 『土佐日記』の前田家本(藤原定家自筆本)や、青谿書屋本(藤原為家書写の転写本)などの古写本ではいずれも「土佐日記」とある。作品『土佐日記』そのものをさす時は『土佐日記』の表記を用いる。注釈書名は、各注釈書の表記に従う。
- (4) 『土佐日記読本』の題、頭書について

井上喜文著の『土佐日記読本』には、角書の表記にブレが見られる。筆者の家蔵資料や、国立国会図書館収蔵資料にある明治二十六年(一八九三)に杉本書店から

出版された『土佐日記読本』の題箋などには、『〈考異冠註〉土佐日記読本』とある。対して、同じく杉本書店から明治二十八年に出版された東京地図調整所編の『新案帝国地図・中等教科』の巻末にある「杉本書店新版目録」には、「〈頭書〉土佐日記読本(半紙本全一冊井上喜文著 全(正価)廿五銭郵税二銭)」と記載されている。現状では、これらの角書の表記は単なる記述ブレと判断し、本稿では単に『土佐日記読本』と記述する。

また、井上喜文には、『土佐日記捷解』という『土佐日記』に関する別の書があったらしい。『国学者伝記集成 続編』には、井上喜文の著として『土佐日記捷解』なる書名が見えており、池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』にも、「明治廿七年」井上喜文没。是より先喜文に土佐日記捷解(未刊)の著あり。(埼玉県名家著述目録)とある。

- (5) 井上淑蔭著 峯岸久治手写「井上淑蔭年譜」(川越市図書館所蔵)二丁表
- (6) 『収蔵文書目録28集 明星院・奥貫家・井上家文書目録』(埼玉県立文書館、一九八九年)二五一頁)
- (7) 『読史総覧』(小葉田淳ほか、新人物往来社、一九六六年)一一六〇頁
- (8) 中澤伸弘「井上淑蔭と江戸の歌人國學者―井上文雄との交流を通して―」(『皇學館論叢』第四〇巻第五号、二〇〇七年十月)
- (9) 井上家文書八一四「地動疑問録」と比較すると「来」「云」「後」「無」など多くの文字の特徴が一致する。この点は阿部綾子氏から御教示いただいた。
- (10) 注釈箇所の数え方は、筆者が一か所ずつ数えた。本文に対する箇所数で一カウントとした。そのため、同じ本文に傍注と頭注などがそれぞれついていていた場合一か所カウントとなる。『考証』書入れも『土佐日記読本』も同様にカウントしている。なお、『考証』そのものの注釈数などはカウントしておらず数に入っていない。